

## NHK の思想的引き締め番組：ダーウィン進化論

Greatchain

2010/03/19

かつて“思想的引き締め”という言葉が共産主義国にあった。これは、生きる上の根本原理であるべき共産主義にゆるみが生じたとき、これを叱咤し戒める強制的教育だった。NHK ではかなり前から、ダーウィン進化論を、そういう対象として扱っているように思える。この2つの大思想はともに唯物論であり、社会の歴史も生物の歴史も、ともに物的な、物力の発展として考える。これに対する、これほどのこだわりには、胡散臭い圧力が働いていると考えざるを得ない。

かつて私は、この欄に「超自然がなければ自然は理解できない」という短いエッセーを書いた。「内蔵秩序」という言葉を使った物理学者がいるように、我々の生きている、生きた世界を、我々に見えている現象だけで、解き明かすことはできない。今、知的世界で、そんな考えは通用しなくなってきた。ダーウィン進化論は完全に破綻している。今世紀に入ったころ、その権威にもかからず、どうしても支持できないダーウィン進化論に代わって、「インテリジェント・デザイン」(ID) という理論が現れて、世界的にかなり浸透した。しかしなぜか、これを必死に認めまいとするものがある。私自身もこの運動を追って日本に紹介したので、その葛藤はよく知っているのだが、これは、証拠と言えようなものないダーウィン進化論に対し、厳密な証拠に基づく理論だから、たちまち普及すると考えられた。しかしそうはならなかった。これは、今から思えば、新学説に対する抵抗だけとは考えられないほど、たちの悪いものである。

現実には、ダーウィンもマルクスも、歴史上の人物として以外は、死んでいる。しかし、ダーウィンは死んではならないと考える人々が、確実にいる。すなわち、我々を思想的な檻に入れて足を縛っておかなければ、「政策上」困る人々がいるのである。唯物論という思考方は、自由や発展を許さない檻である。「インテリジェント・デザイン」という仮説を提案しただけで（古い説を廃止せよとは言わないのに）、不自然に猛烈な反対をする人々がいることは、その歴史を知る人はよく知っているが、思考法を含めて、知的な隅々に至るまで、この惑星全体を支配しようとする者たちがいることは、必ずしも知られていない。（これは、この惑星が quarantine（隔離）状態だと言う地球外人がいることにも表れている。）いろいろな意味で、我々の意識が目覚めては困る者たち、我々を愚民状態にしておきたい者たちがいるのである。彼らは隠れて画策する者たちである。彼らは、我々が、3次元の世界に住み続

けてくれなければ、うまく管理できない。彼らは、超越的次元も、神も、UFOも、「非科学的な」迷信として宣伝しなければならない。現在のように、それが危なくなったとき、“思想的引き締め”が必要になる。

我々自身が**それ**であるところの生命や心を、ダーウィン進化論のように、物質や物的原理で説明することはできない。初めにロゴスがなければならぬ。アイデアがなければならぬ。私の青年時代は、「アイデア」などというものを馬鹿にする、バートランド・ラッセルなどの唯物論が全盛だった。思想界は今、そのようなレベルを脱している。自閉症の子供のように、唯物論の世界は、自分だけで完結した世界である。どこへも発展することはできない。進化と言え、ダーウィンしか信じないということは、本当の進化を受け入れない、本当の進化への準備態勢を拒絶しているということである。それは次元上昇としての進化であって、背中に羽が生えることではない。

私はこの関連のエッセーで、「2重の覚醒」という言葉をずっと使ってきた。一つは、我々を昔から計画的に巧妙に騙してきた者たちの存在に気づくこと。これは今、徐々に、しかし確実に進んでいる。もう一つは、我々自身が、自分の終わりに達しているのではなく、開発すべき別の自己をもっている、「ハイアー・セルフ」と言われるものを持っていることに気づくことである。この2重の覚醒が、今、同時にやってきたと考えられると、私は繰り返してきた。

我々を支配しようとする者たちにとって、ダーウィン進化論が好都合である理由は、もっとわかり易く説明できる。それは、強者が弱者を支配すべき、人種差別の正当性を彼らに与える。また「人口を5億に削減」するための「優生学」という正当な根拠を与える。ヒトラーや、スターリンや、毛沢東や、マルクスさえ加えて、前世紀の2つの大戦争から今日に至るまで、大規模な人類の悲劇をもたらした者たちすべての根拠には、ダーウィン進化論があったと言われる。自分たちサイコパスが、世界で最高の存在だとして、「アメリカ例外主義」などと称して、暴力的に神から世界を強奪しようとする者たち、イルミナティの暴かれた姿を見れば、ダーウィン進化論の影響は明らかである。

またこの理論が、人間と動物との本質的な差を認めないということは、平等に見せかけて、神が人間に与えた尊厳を奪うことであった。(今、こういう言い方を自然に、ほとんど誰でもするようになった——例えば、プーチン)。人間は究極的に「宇宙のゴミである。」これによって、現在に至るまでも、どれだけ人命が有効に軽視され続けているかしのれない。

こう言ったことすべては、社会ダーウィニズムという、ダーウィン進化論の社会的な影響であって、純粋な生物学としては、そんなことに関係がないという人がある。しかしそれは間

違っている。悪は、明らかに、ダーウィン生物進化論から発している。ここで詳しく説明はできない。しかしこの理論は、仮定がすなわち結論であって、証拠と言えるようなものは元々なく、逆に、ID 理論は、科学的証拠で固められている。反対者が故意に曲解して言うように、それは神を前提とする理論でもなく、神を証明する理論でもなく、神（インテリジェンス）の存在を明確に“指し示す”理論である。正しく理解するために、読むべき本はいくらでもあるのに、戦闘的ダーウィニストは読まないことを奨励するという、嗤うべきことをやっている。

最後に、ID の証拠（ダーウィンへの反証）には、私がまとめ、大きく分けた 3 本の柱がある。前稿と同様これを末尾に掲載しておきたい――

- 1) 従来通りの化石記録――徐々に変化した中間種というものは存在しない。「カンブリア爆発」において突然出現した、多様な動物は、ダーウィンが最後に現れると想定した、最も基本的な、ボディ・プランを異にする、30 種あまりの「門」である。最初の単一の生物が、枝分かれして多様化したのではない。
- 2) 還元不能の複雑性 (Irreducible Complexity) ――生命体の基本的なあり方。すべての機能する機械は、各部品が、一定の目的のもとに、一気に組み合わせられてきたもので、一つずつ偶然に結合されてできることはない。
- 3) 宇宙的微調整 (Cosmic Fine-Tuning) ――宇宙の基本的な物理常数のすべてが、最初から、人間や地球を生み出すように微調整されていた。そのうちどれか一つが、わずかに変えられただけでも、このような生命環境は生じない。